

【研究会報告】

ボルネオの中国と中国人

日時：2012年12月4日

場所：京都大学稲盛財団記念館

趣旨

マレーシア、インドネシア、ブルネイの3か国にまたがるボルネオ島は、(小国のブルネイを除いて)いずれも国民国家の周縁部に位置し、地元民／外来者や自然／社会の境界があいまいであるという意味で、21世紀の今日においてもなお国民国家の広大なフロンティアを形成している。東アジア世界で中国が存在感を増すにつれてボルネオでも中国・中国人の存在感が変化し、ボルネオ社会の新しい姿を見せつつある。この研究会では、「ボルネオの中国と中国人」をテーマとして、第一部(山本・及川)ではサバの先住民の家系図とサラワク出身作家の文芸作品に表われる中国のイメージを探り、第二部(市川・横田)ではサラワクと西カリマンタンの華人の通婚を通じたコミュニティ形成について考える。

プログラム

報告(1) 山本博之(京都大学地域研究統合情報センター准教授)「ボルネオの黄龍の子孫たち:マンジャジの家系図に見る家族と民族」

報告(2) 及川茜(神田外語大学講師)「サラワク出身作家の台湾経験:李永平・張貴興を例に」

報告(3) 市川哲(立教大学観光学部助教)「先住民との関係を通じたサラワク華人の自然環境利用とコミュニティ形成」

報告(4) 横田祥子(日本学術振興会特別研究員 PD/東京外国語大学)「周縁的中華圏」間の婚姻交換:インドネシア西カリマンタン州シンカワンの華人女性の国際結婚」

報告要旨

山本博之「ボルネオの黄龍の子孫たち:マンジャジの家系図に見る家族と民族」

日刊紙『サバ・タイムズ』のカダザン語コラムの編集者として1950年代のカダザン人意識の覚醒において中心的な役割を果たしたジョセフ・マンジャジは、マレー人や中国人に対抗するカダザン・ナショナリズムの創始者・推進者の1人と見られてきた。1980年代末、マンジャジは、自身は19世紀半ばに広東からボルネオに渡航した中国人男性黄龍の子孫であるとし、黄龍を起点とする家系図を発表した。

マンジャジによる家系図作成を手掛かりに、今日のサバにおける民族と家族の意味を考える。

及川茜「サラワク出身作家の台湾経験:李永平・張貴興を例に」

サラワク・クチン出身の李永平(1947-)とルトン出身の張貴興(1956-)は、いずれも台湾で執筆

を続ける中国語作家である。彼らの作品にはい
ずれも故郷サラワクと台湾での経験が反映され
ており、その文体は異様な印象を与えるまでに
彫琢が施され、磨き抜かれている。本発表では、
多言語状況を背景に練り上げられてきた彼らの
文体に注目しつつ、作中でどのような視点から台
湾が描かれてきたかを考察する。

市川哲(立教大学観光学部助教)「先住民との関
係を通じたサラワク華人の自然環境利用とコミュ
ニティ形成」

マレーシア華人を対象とした先行研究は西マ
レーシアを対象としたものが圧倒的に多く、東マ
レーシアを対象とした研究は少なかった。また東
マレーシアでも少数の例外的な研究者を除き、
華人研究の視点を華人社会内部にのみ限定し、
数多くの先住民の存在や熱帯雨林を利用した経
済活動(サブシステム経済および森林産物取
引・商業伐採を含む)という、西マレーシアとは圧
倒的に異なる自然環境や社会背景から華人社
会の特徴を捉えるという視点が少なかった。本発
表ではサラワク州ビントゥル省のある河川上流域
の華人の事例を通して、華人がいかにして先住
民と通婚や養子、商業取引等を通じて社会関係
を構築し、周辺の熱帯雨林と関わってきたのか、
そしてそれが河川上流域の華人コミュニティの特
徴をいかにして形成してきたのかについての事
例を報告する。

横田祥子「「周縁的中華圏」間の婚姻交換:イン
ドネシア西カリマンタン州シンカワンの華人女性

の国際結婚」

インドネシア西カリマンタン州シンカワン一帯
は、台湾、香港、マレーシアなどへ花嫁を 30 年
以上に渡り送付してきた。この背景には、グロー
バル化の進行に伴い、再生産労働の国際分業
化が進んだというマクロ要因のほかに、1967 年
に発生した華人虐殺事件の結果、発生した難民
の経済的停滞、家族内部における女性のジェン
ダー役割、そして移住先社会のジェンダー関係
の変化などがある。本発表では、シンカワンと台
湾間の国際結婚を契機とした移動とそのトランス
ナショナルな家族形成について報告する。